



五元集

拾遺

貞

中村俊定文庫
文庫 18
290
4





五元集拾遺

春之部

日の暮をさすかき一落れあふ
年之如森中の礼冬早月水
松のこゝ伊勢の家ふ人き誰
神明阿ふ古と一免々

況合れ松もくくさかこく弁
落ふひの膏もどぬ日ハ到江岸
落ふもあはる影剛けくく千の矢



初まや頼中あつ新辰子う
世の中乃榮輝も案とわけれを
糸文の四判を来うま子此間

蓬萊の韻

鳴るよけ之の書院此かやば

福祿壽の韻

長く日や年此から乃新法作

宝引の韻

保昌らうう引あう胸ふく

松うやまうさくあ海おまう編
花さかた若よ屋よあ春か海し
春れあか海く能去のまを新

若菜

傘採冬はくこひ草こま菜か
菜はも通一白奥を去野川お好く今
はうひの七粒お冬まかじん
うりも薩書よふ里の朝若菜

大根の画韻

兵乃ひかへぬやうう子れ日か

春の須紙くけぬ帳の三枚目
はりの冬陸月五日田市に集つゝ
家々々々帳のなましてよかきしとや

梅 柳

さす枝れゆもくもくもや結ぶの梅

藤之はる人下

古くは梅おしへもよかきふれ

白主改名 詞古くもくも

白星の向れ隣子やむめと星

梅小きくもくもく白帳とく

け白又文字らふてはす借へ

小袖とせく侍自へむ免々書
若の梅振いりもかききく

芭蕉翁百ヶ日懐旧

雲の梅まよむししのむしり

詞書略

三日月此命あやかき一園の梅

詞書有今略

鏡のこ影そり眼の柳りか
曲きくくと曲くすかき柳り

あらしんす石松の掛物自画讃

凡がらふまゝに由りて柳のふ

山更上京

貫つしもわくゆへく柳のふ

傾城の韻

春柳は額の栞や三ヶの月

鶯

鶯のうたがけはさけし
うらひすの暁をしきりくす
鶯のふくふく啼きしを世に
うらひあや氣らくし園のいぬ

あはれ

鶯の子を子あはれく
春の曙あふま士をさかす
桜のうらみを見する
すなはれは後さす見よ雪のふ

大田の意

近隣意
京所此猫かすひりく揚屋下
春の意
埋くすとの涙や
幼意
くすの百目あま子小別
守意
柏木乃柳をさすあはれ

思他^ニ飯く^レ君^ノ方^ハと新松梅
疑^ニ花^ノ夏^ハ胡蝶^ノ中^ハ似^レる^ハ辰^ノ衣

人^ハ小^ハさ^ハや^ハの^ハ粉^トさ^ハう^ハけ^レて
年^少少^ハい^ハふ^ハさ^ハめ^レり^ハあ^ハす^ハあ^ハす^ハあ^ハす

吾^レ京^ノの^ハ初^ニ年

初^ニ年^ハや^ハ賽^ハ渡^ハよ^ハみ^ハの^ハま^ハぬ^レる

初^ニ年^ハ小^ハさ^ハの^ハわ^ハく^ハ此^レ例^トと^ハさ^ハう
の^ハゆ^ハ子^ハ達^ハ小^ハね^ハね^ハの^ハこ^ハい^ハり^ハ

ら^ノの^ハ字^ハよ^クし^ハ習^ハひ^ハて^ハも^ハや^ハい^ハら^ハぬ^レ山
山^ノの^ハ階^ハ一^ハと^ハ多^クと^ハく^ハす^ハ入^レ日^ハか

川^ハ燕^ハ編^ハさ^ハす^ハ非^ハた^ハと^ハん^ハ地^ハる^ハも
啼^クる^ハ原^ハ糸^ハは^ハる^ハも^ハ在^ハら^ハや^ハか^ハま^ハあ

授^レ記^レ品^ハ無^ク有^ク賣^レ事

く^ハま^ハり^ハし^ハら^ハく^ハ彼^レ界^ノの^ハ夕^ハ日^ハ紅
不^ハ生^ハふ^ハ滅^ハれ^ハら^ハと

海^棠の^ハ舞^ハと^ハ情^ハを^ハ舞^ハえ^ハん^ハ像
伶^ハ人^ハ此^レ門^ハあ^ハら^ハし^ハや^ハ春^ノの^ハ声
世^ノの中^ハあ^ハら^ハる^ハが^ハき^ハ難^ク子^ハ此^レ声

惜^レ春

梅^らも^ハや^ハい^ハと^ハ暮^ハふ^ハらん^ハ風^ハ中

かみしや江戸とてなまこ如風中

支考の巻地のこぼさしきらるふ

白川の園より見返すといはれり

白真露命

月とほお生雲 真此腫園

ふ奥のふりりおよの川けりき

画攢

浦清のきりりのまきり落此声

引くしてまをともこのふま此弱

駒とせりき見ふる傍ふ落此だ

すし中も揚やほりやほりし

泥鳥の腕をかえりんふりし

憑りすまめしきや巻の枕

東潮海守見也

出羽りや人並世活と連衣る

屋敷入やまめいふ路くふははは

鶏合

炭喰のきりふきりぬ新しひし

毛衣り服をきりぬを雪^{トコ}り

刻り入るるる冠と簪もか

老多此りふまや言娘園本丹
拾足とひささく園のほろふ

汐干

貝はるや白洲のまは流是松

貝も貝とむさゆら

あさる貝むのぬるさひぬ
る沼や塩瀬ふよす於さる貝
子安貝二尺の浦を産湯りか
浪推ふりしゝ産螺れかゝる
命ふらやうさ上げはる此葉

海松少るや浪のけさる此貝
すさる貝をれも濱見一人
けさる中を花をすめりす貝
江橋や且船ぬる汐干貝

雜

かつさの神をのまを此雑
いさるものもさる
世をさふ多酒らん怪、雜
とるやれ鉄のすさる此鉄あり
紙紙のさるいさるいさる

死

後のあるはなをふめく 橋のか
さくす 橋ふの目玉の志くせ
口ひきと 奥く 吸く 橋ふ
こききき しく 中 教も 橋ふ
京中 一 世の さく 飛 橋

橋回の本望

山橋 形と 泣く 人の 橋子 へ
長 橋 へ 翹 彼 へ へ へ へ へ へ

山橋 渡 へ へ へ へ へ へ へ

浦くの

花 橋 へ へ へ へ へ へ

教 師 と 中 へ 買 へ 橋 へ へ
古 丸 の 車 へ へ へ へ へ へ

池 へ へ へ へ へ へ へ へ へ

漢 文 へ へ 橋 橋 へ へ へ へ へ
花 へ へ へ 橋 へ へ へ へ へ へ
大 佛 膝 へ へ へ へ へ へ へ
江 坊 へ へ へ へ へ へ へ へ
池 利 へ へ へ へ へ へ へ へ

庚申の雨とて不登り

けしきと人々此さるるふえりふ

續 莊子

彼是を瓦雪の保真のや
花多もつととあつて
かんとやちつちつと
ふりけつとやちつと
神カ品現大神カ
法のみちつとやちつと

憶 芭蕉翁

月をわが湯の寺社強り

代 蕉

彫^り笛^の筵^の義^の心^は晴^{せん}浮^世は
屋^形舟^のふ^え女^中お^より
湖^春と^いふ

泣^くと^いふ^は舟^のと^わり^の心^は夏
名^のあ^りや^作て^は衣^の心^はあ

棧 鳥

飛^びや^天女^負は^るか^はは

寒食二句

を人言や窟下小猫の目と怪む
く素すく小寒人言のちれ古自所書

画讚

友のらるる山を登きいて情あり
山吹の黄ふま玉もあそび
まじりしす子豆腐と切て持てあそ
茶子此里の茶子けりあそ
あまぐの子の名をやうて
こもりやあひ子あそ情あり
あまぐの茶子けりあそ

あまぐの茶子のさくら八布とて

何必逃杯走似雲け侍大西華下

けねとあそびて遊すけりあそ
あそびあそび何をするあそ
俗ふりあそあそあそあそあそ

三月三

あまぐの茶子をさくら白雲や

夏之神

寄耳己

白免もあとも中とら落もうく
は新もしまのトとや更衣
ぬぐくや冬千と祝言衣く

東叡山院

傍正のまきさひとくやま楓
く日ふうくる淨飯涅槃此ま簾

時香

わとくさす二声めふ冬出馬く
あはさうてトカチ標くらふか柳とさん

香と身る叔守小鬼おし子能

山田市之巫

ちのくくとゆすはくや節台
祝多て耳とわくちて印さ
ふ白くしす我と啼まの杜宇
証くく警破付る神の戸お
あましくと纏まうまうて引籠
はまて来すお際のをちわさくす
あまもほすくし一声を

郭公中入すくのちを紙く那

さしこもる本巻りくはくさあ
藤巻うごたう奥をほりやあは
峠の戸や犬よ、地書と隠者考
ほつたう

ゆきまあやも輪あある浦ま

鯉

ふれあう夏のこえけらふ
うごの地あふくくく鯉は
素鯉れ卵の中れあらう
人のこもせし

人のこもせし

本質

あふま海とえましく鯉は

丹根尾系がのとのやうな

系動と

軍杜丹移るや移るその大巻
むるや漂山と名中やうま
頃広北山うー海あ何とん香
嶺とやんてあ卵のふと憎ら
濱中家の義士考といふ

たまたの縁と川にさかすか

伏見此何素より

杜より女せりこのころ一あり
依城のまぶさな一やりの若
け一此も朝暮をの調こころ
静し深き風もこのま一や
女子もくけ花ちる此頃縁さ

上新寺

灌仏や夢中むうく新徳を
紙合ぬかる一やうも世をい

岩倉亭題送懈

みしあや清くくく梅の足
縁かや朝日す川の細金此声
あまの人の別業より

内川や春此うき果おなく
枇杷の葉やとまて角を響
秋より也志げもにく一馬
馬士起くくをさつあまゆ
まおあ一唐小月をえん
秋
能化堂表はく信を氣を引

壁のまき藤一と年とを免やう也

豊年

ぬら味候ふと年と清くむ瓜茄子
干瓜やたうらふくてもまきと也

祝産育

たうらふの皮と一豚の結つみり

大所亭法言 何去略

はのきんた葡萄羹四もわくもくふ

志あひくは坪の梅子けり

梅いゝら扇かのおらあまおわま

壬二集

さきくはくはく月さあま
名とくへいふひまあま
とあまて

さきくはくはく月さあま

なよふた末葉のくして紙のあ

かやとまきとあて

もの、物北懐甲や庫のくら

粒うらん驛ふとあまく鈴たわ

懐網沖ふ冬束つ帆くや

懐之長者の夏や長牡丹

画韻

粽申ふらふみや草の紫台蟹
こころなえ物うひんくうふあや
根合中津地よりすはる

廻文

けいけいこのめや言の夏田沼
千山亭新定雲舟の絵子
陽の景を望むと新く五月雨
さかたのよやくし吉野と出た

三味線や海夜ふらむ五月雨
魚をかきくさか——くさか

題江戸八景

住くらすまの深川の松花雨五月
さくさくや湯の極赤山おけり
五月雨や君の心はかきまはる

江の鶴

鶴雨の窟、海路一曲南へ行く
何を言ふすらん鳴くむ六月雨

傾廓

八之湯やかりとさるる虎の爪

旅人とあはれさるる

津坂や岡の九月始めの馬

腰紙

藤すりの、簀紙を交麻の五月

自愧

扱あらしと母麻さるるうお糸

多勢のくおまふ好川のつとあふ

和古詩

只と焼くも糸を煮る秋の林

いそれ社園例をさるるさるる

あしと紙くさるるさるる家おも

むすしと煮ひのりさるるけぬ

さるるさるる麻あはれさるる昔と

かぬい

ぬわけをひさるるかさるるいとい

川舟の淡

昔州小勝くかさるるさるるけり

菱川子花より仕出す着きよふ

字派よし

柴舟よりあつきくとも路管ふ
仲の戸小ふの葵うくふ雲小
葉まゝとまはれまゝかゝるし
多舟や鞭うけつゝぬる根山
田植うけくも茶屋するゝ角田川
合ねまゝく友とまゝく田うけ
子乙女のようにとぬ顔に朝も
招折れ早苗穂ふれ秋をわぬ

會盟

交りのさかなく亦うし菱料理
まふりく葵招小木のまふ

筆前我

清官士定家の息とすけけ
ふとや申しさうかれば葉まを
とてて庭を裁や名付も
み雨れまといとすこれ
おまといしゆるふ

海老和布とや管の端義ま角豆

望海觀遊

海松れまやけいふ風の磯洲松

濼倉れ濱出と

海雲あまや見れぬ出みと登りかた

止波浦へ

地引すと登のすかしくるれ夕

き浦の楳取押さりては橋の

下へ入

帆とくさる鯛のさばるやきさし

舟興

文とわとあまれふの光り那

朝日に七星をまきしる名志や那

石れ枕小郎やわたりるそれき

岩根とすむむ一鱗あり走藤

松女小あまをまきて渡りし

藻れとふや後ろり出かてさる

原のふや海光洲す袖かきし

海れあまや思ふもさし深まる

長あまの沈上れ破風あす

建長寺無詩俗了人

夏小詩をいふ俗をいふ夏木之
谷木の鬼をいふともいふ

年の年午此月午の日午乃
附くけふ入る

駿馬増ふ入る

日休碑いふけふ
此小いふけふ

いつの間にかけいひとて夏月
言ふ入る月や志海の中夏土の山
夏の月此を夜ふて五白あ

市此徳全のいふ

出はくろく葉あつて
夜讀書

此をあつや枕いふ
申の日とて

扱早新ん紙帳か風をいふ
此を名のいふ

音の吸も花とりて
宗長のいふ

橋此一つ二つを敷とせしと
むし白ふ花をくまきく陳皮を
敷きく火く又新白く橙を

松買秋航岩城一強中一抄有千
信もややす一はとと

吸きく火小使第く一固一
佛骨表

えくくくくくくくくくくく
射者中、奕者勝

蝶子よりのまきあきく 燕あ、河

信信くまきく人賜をくく

錢中、

梁の蝶をさくく一馬地上一
蝶おくは一真おん反の菊

云まかけくく日やも

蝶はくく一妹志也名や瓜作
母のりや又流くく言桑瓜

あまきくく一皮を
おりの塩糸のまき瓜の存

瓜の一死 又冬く小略す

け花小飛のやまのく瓜拾茶

後文川道地

富士行や細代小火あきおの小屋
白きふもきふも衣やふー一落
くまふは又早くーいふー一日記
明これのふれ木のをもとやとてんえ
水室山里葱れ紫白ー一日付料
不奪百姓膏腴とら文選の詞へ
百姓たふゆる油中ー一扱酒

惘農

焼録の宵中ふあつー一田又ふ
和彩買や朝見ー一翁と名取
をくや猫は糸目くを思ひ
藤ー一鳴くや六月卯ー一まよ
百姓のふおくもを先よるむま
白きふとら菅くー一と外價小
こをといひかゝるひのこのは
く終てすー一御借此奇仙に即て
長新川ふよー一とてさうらぬと
のまふふ交あやー一とち此車の

林のうけ小能をかきしめらあんと
さういふ者此れはさうくしおま
りむく此老の真ぶとせしむる

あまふは非人美し麻蓮

一晶のち坊より

日蓮よ木す備し蝉の鳴く時
空蝉小吉系との新法ゆ那

木戸處とわく道む

蝉と聞け一日鳴くおれ處
入湯のく木質とさうりし

蝉の声さうらとあつさ楳中

縁子と懐紙の表帯にして鳥
小なるをり道て

飯粒よりかきもさうな、蝉の衣
視彼蝉、貧者小衣をぬくを

祇園敷のかり金志片ふを

初の中とまゝさうは月の中
梓天王は核取

里の子はあまよひむ報子

後叔談

傘よ蝶蓮のまはるく怪く那

詞古略

考一 湖蓮より淡と包らる

得正観音像

ふ小蓮膠く中ます包白ひび

あききほ作はは花の平受た

くもくもも庵山の交と中

さけうらるるもや

あわくくまうくまもま白蓮社

派坊の影くくもや蓮く那

蓮のまはる赤繻とく影く暑く

帳けの桐干暑く一星ハ北

冠里公伝中松山初入の時

川と白布や浦の昔屋此袖は

小女此帯不くくも家あつさく

信九布、持一巻居る

朝比奈の昔屋へ入一暑く

宗弁のまはるくがさく

まはるくまはるくまはるく

くや一まはるく一傳

生死松いづら忘れし河拭ひ
死の海を河のうらやも中人

山田悦亭より

汗濃きよ衣の背縫れ申うらや
身おろしむ一まぬ織も浮世うら
何とぬ織端編ききし紗の腰

小所の談

腸けけ休むをうらや大うらや
かたけうのおうらやうらやぬきか
えこれ松子風の垣ふる庭うら

うらやの風信日おくる 園春小

所見

花うらや星うらや川色れ涼うらや
宮々の文子娘のすま色て又うら
はよあらしもすまをうらやうらや
うらやとてうらや

夫山の海をうらやと涼うらや
夕ササ原すしうらやの誓うらや
涼うらやめうらや今うらや海うらや
少年と女と信しうらや死のうらやとて

けふよ老ふらふか〜夕すまみ

布袋の襖

藤のうらと子とも恋すか夕涼

祇公日次の巻ととらわらえ

河原垣陣利とひさす縁か

美木のすし〜おのきとて

朝令ふ橋よ〜あ〜下すこ

夕す〜あ〜おふせとら利

けふとつとどの集あゆへのふ

〜予晋すあふと圓畫と

〜

抱き重や妻くえ〜さあふらふ

曲の膝あふ湖氷と思はれ

漣やあ〜表とふ〜む〜る

〜す〜う〜の〜

〜〜襦か〜う〜は〜る麻呂巾

夏夜や暁ととれ柄板水

井ふ〜わ〜ふ〜の〜お〜ひ〜け

はやあ〜

龍あけよ信ふと信す發此長

露沾公能真切

日あやけく海のこころのほろも思
 たまふまゝかきてはく 湯まこと
 あゝまふまゝかきてはく 湯まこと
 まゝまゝかきてはく 湯まこと
 別後をよそかきてはく 湯まこと
 とくまゝかきてはく 湯まこと

け備ふく一ふふにゆく氷も
 世ふりてはく 西の風あけはく
 独りよはく 腫の 楯 雪 居 水
 夕まゝかきてはく 湯まこと 堂

黄まゝかきてはく 湯まこと 堂

烟 雨 村

夕まゝかきてはく 湯まこと 堂
 申まゝかきてはく 湯まこと 堂

雨 中 吟

白ゆき 杜若の 葉の 影の 白
 清 茅の 葉の 影の 白
 一くまゝかきてはく 湯まこと
 夕まゝかきてはく 湯まこと 堂
 申まゝかきてはく 湯まこと 堂

夕まや家と云うく啼一家鴨
ハヤと川に峻嶺とこの北岸
根挽のらすうはや一平のよ

望相品

平らら又海金とくう日、懸を
くくもや掃金ふ似くくちか干
扱ととととくくあふくくくくく
片の戸むおきき霧の崖う那

醉登二階

酒の瀑布は夏の九天うう
初やほやくくく此下のるる

廣のあきお

すびつこくくくく夏の炭俵
陣あし樹とすくくくくく
先ねとをくくくくくく
何ふくくく六月相と枯る人
市中のきくくくくくく

三河

秋のくくくくくくくく

法後

夏後内作の書れるるより

秋の部

井の柳三つふと相此一葉か

ふれ臨一葉ふちうくおまゝか

清山子のこころと見 画多探雪

りう琴と筆と大報と後中

まじり一か

冬

けいこ相の一葉や半は声

竹居ふまうまうく住らひら

信をとひら

子戒の筆とくまは一葉か

ま日ややぬく桂れ一葉川

河古

字や秋樹をさゆまそ七言羅樹

父の想い一葉か

おまゝか

一とては画なるかけその後
 あらうのや種ふ出るまじし遠ある
 幕下りてはあふの瓜此二を糸
 船白ふり川若出りし使
 入心の書志の思もく恨む程垣

七夕

星のや人此心狭瓜くさ
 夏は松や竹も冬空の星
 素堂の母七中七夕の女万
 葉の秋此七軒乃奈の勸を

星は夜よは火細く春をま
 三遷のむくは懐ひてちりさ
 けの煙と春ののむと一日
 わりて七夕の奇とまうけをい
 とけいさぬ

文月や春をくみまも母の恩
 杉買らひし川流中や天の川
 書早よあふよ一とせあふ女
 大知れおそ明よりく天此川
 唯早や額も春ふ子鞠かた紙

秋七種

夕陽のなみちのうらやま女希也

女さくへのんちくして花は

さきうひはるを七夕にむ向叶

よせしそ

霞のしりや味境さしやせふふり

海辺曉雲

橋もや相識しそふふ

海原のささきさかむらさき

こもさきさしそささきささき

夏のしらべ柳子とささき

七月十日に夜を歩ゆり合はれ

柳子のささきとささき

夏とありし懸骨のささき

相去あり男也

秋もくさき草落さくさしとさ

又さき秋のささきありささき

ささき此處のささきありささき

ささき新く西瓜のささきありささき

ささきささき新くささきありささき

遍照の懐

信正よ鞠のわつらぬ女帝苑

龍舟ちきりぬ迷惑を

昔の葉はあひらけとてみか

葉らさらり田の推つとて

くけふるく

西瓜冷ふぬ此葉は遠き

神仏ふはれを安まらばや

沾性録別

鳥をくむ人の者くとも

うたへとも見の後のきん

芭蕉の葉も葉も角をか

ねる白くかけしがむる

茅とくふ雨と雨風の

鑑素堂秋池

凡秋此荷葉二葉とく

葉冬もして去れ掃除や

盆會

かきくすふり此りさ

きししちねは借今乞

右の二句文ありそふ

陀羅尼品

浪と罪此様や暮すも利

分都原

みまきや分限ふん田の彌勝
 又月とくもく刺鎧と権領
 一世の人此のいひをきくと
 能切此かたても趣りく大教と
 生靈酒此下くを親仁に
 入りては入りてはあし
 為ひをては常をわくふまは

切なるまひを

親と子もまよきくや蓮賣
 柳経や声のなりとまき才子坊主
 一長金段をおろしておろし
 踊子く妻此を常ふ酒とく
 とまよしと名も優美なりく角力

露

赤院のけしきさくらんをまきや
 船とくまきく此まきや園乃外
 み月やひくくはけしき娘の子

子子多き少き梅も子に付おきて
茶にけしき吐きむらねや影三層

芭蕉序の歌

吾を誰と私敵と隣とさあめり
座の可妻吸り犬わくまじり

長きよなるも懐紙の奥小

二巻を千目とさすしる座ふ

宇治の山ふ

川を霧やさあさくさくのけが滅
音夕烟りあけくすまは浦

寂蓮

和分れ骨核く山の夕夕那

まゝ海や浅黄小なりく煙乃書

秋の心は仰し吾佐の藤はえど

南歌の具詞あり多しと聖

田に玉川は冬西行上人の堀井

わくと強りしる

ふる井を名ふか流りと秋は雨

七月五日二番三回忘る事

智海作をよもあひて墓誌

後州誓願寺念佛堂

三人の声不あはれよ秋乃夢

虫

すくすくふねむしーさうさ後兼
極よらるしーと碑の妻いすゝん
ほらしてあやうせれまもみち

元禄六年仲秋徳川芭蕉庵

海主の戸よ入し

生綿とるも雪とらぬ生駒山

一しふの妻もろくむ天保丁

翁おもあをこてあは人の

めつらまふ

後より荷分れ文や天保丁

野湯豆腐

徳の湯、厚と薄さぬ豆腐汁

士を先祖の切おれぬはらた

血を枕席よやまんさす一歩幾

場子の心むこしとる古く

みとたつらむ人くそ命を

后れまあふりけてあかり

目ふたりの娘はよそあやうらうの所家

河公あふ略

名月やそまも筆お庵ま口

河公略

信濃小を老ふ子多ありりよの月

仲庵の画談

月うけや吉を帆おすくこま山

長柄又皇の記

もろ月とむりーの橋お村目

月と信也紙紙此小者本る此下女

そりや侍おあしらの君と伯父

満百

河うぬの月少成りー母れ親

娘ふそ丸う程を月ふり物

酒ううう報うらりーけの月

唐う此片融うー月の雪

燃うるー大此をやうー母親

五と橋と画う

中橋の君のそ中よふこの月

月此まきー詩の舟う山う川あ

傳と咄しつて

少使に託て冬月と云ふころりるに
脚ゆきも幽谷やうふ野馬込
月日此粟氣痛著くつは母為
向來し推しる里此杉葉より
は多材やふ歯ふさめらるる細の表
いり粟子袖やう後のおもひは
深川一巻屋しるし

粟賣の玄園くから用ありか
癸酉八月五日これ直立久華

送の場し萌心の想を懐

て四季の起別と志系

一 漁中 様も木葉と散り耶
野たちくさひしを眺る
程赤子少年を福しん光り南
稲うや穀を播き葉の中
松の尾の葉さう妙しきと
塚うつしう層子松おとと
此まふしうあす中は志め
初しげら

けりぞしと都の土やあはれ子指
 松のよも冬花と吹あけし梅草
 東國風来す此山のまは
 るる付
 冷泉の珠教へはあはれ草
 草将十唱句

其表 不二班 齋草
 葦四交白杆
 其軸 茸 蠟燭 消 半

石突 角仙居角蒂
 つま 笠回菌 獨樂
 燒松茸 松枝菌 返報
 塩松茸 不香松 雪漬
 京山 葦 女山 雨重
 其賞 北 寛 小松 茸
 献上 祝 菅崎 生草

菊

菊の下草つるりし名の草

藤の木のつとをさうと一園の菊
千はれ菊が人れあ字志れし
柚のまや記とくくは菊のま

主陽

菊の陽葡萄れくふ志くみり

千家の騷人百菊れ能信

菊くくや菊子詩人の質を賣

きくもみらまをさうらけて流るめ

く入ふくありある枝のむく菊

内友風虎公十三回忌

菊れまやたがくよまは後し

九月九日菊を拾ひくく

きくや名を星小輝くれあま

菊花錢別

友成冬く菊れ使く梅くま

子菊の柚乃菊子れりし白

十二夜

白菊の養めく菊く子存れ目

くくも菊御さくく子

子の月松やまくく江戸れ

けし子と子ふくくやな母
ねむし此物を栗よ鳴さきり
家より川もさきもきり一石の目

鳥

木兔や百舎よえくくゆりこの
にき橋の片山くけや笑ひ菟
山く此戸よも窓もあく柏
まき鹿よとく稀く負きとさく者

小倉を長哥

アキくく小坂の中山中

中村少長夫婦連く上

系せし時

山をくくくくくくくくく
紅橋ありく山をくく人のまじり
山をくくくくくくくくく

新坂六向港

まはらぬ唐のくくくくくく
義のつらき春やさくくくく
お葉の食葉を秋のくくく

多秋

丁度虫と申すを以て室に於て書

九月を

福を授けられたる秋を懐念す

慈園非

傾城の小舟を以て九月を

をく部

夢よりくく月をくく娘を名にし所を
葉の如くも半長を以て所を

神鳴のまき虫ふありし所を以て
今態を志すくく所を

園河の繪

系山を以て結ぶくくく

七と七を以て七回を

七と七を以て七回を

七と七を以て七回を

七と七を以て七回を

七と七を以て七回を

七と七を以て七回を

合

四十三

後む落くさきと中こそ時由り
松東のしきと向と見し時あり
けりる晋子まふさる八幡
空ふ落くさきてのたありと

風 丈三郎

木くしと世子拾りて如三郎栗
用とありぬ松平のうけ目
芭蕉翁終焉此記あり
かきうらとさきよりのや松原を
みよめりい葉山子にとりて鳥か

みよめりい葉山子にとりて鳥か

曲の平と幻住庵よともひひ交
翁の居るべきと推の末と
すか落しもすまぬ翁の末は
玄賓を世平見るとまよ干葉賣

画 澁

松一末と食の松とこれ枯木か
坊主あり清及んて人々あり
坊主ととりてと

坊主少長清小唐坊主と海

45 46

宿僧房

わささ形一圃かのおあまを業
お次へお敷をさくくも柄う那
或る中や居士此敷のうけ不
張仔屋の算盤をさくく少お街
唱子も来お明ふの夢を
村子もそおおの幸一境の
人の毒むくくくくく
此の巻は意とらよふまはる
片くくとおれ危やあやあ

七葉下忌や自利よさくくく

夜真

夜真川 益人犬やき川山
犬引くま腐持向くう里お真
菰一まらあやを今れやめ鳥
影見世市川之絆を祝す
う川すすやあまを氷くあまはあ

夜学感

琴水の松や燈塔灯臺よおを
去る別けくくくくく人のあま

月小酒賣不許入内としな
るわし〜

多家の隈より〜
晒むさやふふ〜
町神一系在ふのひ〜

貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午震月十九日懐旧乃

〜と述ゆ

常々〜花橋のむ〜

震月十九日七馬候于黄門光国

卿之清茶亭題周山之佳景

一 此の清茶亭の清茶屋む〜

〜
田の青山あり〜

多此之破屋清〜

二 清水寺善哉

権杖会枿や〜の〜

六角堂子堂小町石塔
〜

三 耕作の清茶屋

九分とらふまふ屋も昔もくく
はひりてく人根甚好ふお
引く指さる指し漱とくけく

根涼ひく喜れま苗やあやめ州

四里木れ也茶屋 けんすく

生後とくく堂舎樹林
つよふん強しぬま舎の軒也
おけり新よほ藤をくく新
千一とまつくく

我や穢牛も喜候つよ木茶也

五夏相 お指さる夏茶 けんすく

夏葺やあま道よやとる不破庇

六西河堂 屋のの屋も柳

彼は所より北山は角く
とるる岩る乃若屋水
すゆともおる位おく
とよせく

炭や山岩間こかーれはあま

七唐橋 産内をんて出く

海系海あつく若雨
とよせく

出橋中 勢田くわひん人

八八七の元はぬふとて

坊多新月も所よ清川あり

九河原書院より先く水吉傳

と評しての笑

八八代とそ河原水鏡は流子と

十西湖より先いいと後の中書亭

よ入る所柱白を憐むてり

夏よ毎舟よ糸一と西湖より

ふとそと東坂くくを吹て

詩とあき^漢新ぬむまはれ橋ふ如

右十妻

系此出右岸の思人をも鏡石あり

松風や炉よ家生をゆく西屋形

鏡よ鏡と一湖の敷系系或は

鏡

妻ならぬ飯りもみとお扱衣

鉄炮のりもむくやあつとけ

もを切るいよくあつと飯の面

詩くゆや松に北河豚といふ

鏡ふらう寸鏡中うらみさの鏡

しつゝふれ清きもて 盧仝も雪はぬ
をの雪子け小使を何奴つと
扱出しくさうら 拂ふ柄袋
重たもー 洛新の掛菜まみれお
秘蔵の鶴は産るをとおしめ
ふんふん
雪は子清平や 雪くひの
朝ふくや月雪を産るはの味
雪子向てく道も蘇鉄の女
秋くあく昨乞の雪と麦畑

極寒

さく火よの遠路もほしし事
手執信と忘ぬとまこと此神和

許たきの歌

神くまく 暖くの一戸
おきふらう とうりらか
ふもー 奥 ともみられを
おもー 籠 海もむし年
ふもー 籠 橋くし
はねりし

世をたもつげし 世一のふり
氣はあふふぢる くらゐのあふ
七十古来 稀ありと
やつこゝろ心 於ゝろり
酒をかくらん 杯をさ
あゝささるゝの 杯をささるゝ
凍死忽死の 境や杯をさ
漫成五倫
君臣有義
家の子をささるゝとささるゝふふ事志

父子有親

純けや情を疑ふを疑ふを疑ふ

夫婦有別

夫をささるゝとささるゝとささるゝ

長幼有序

長をささるゝとささるゝとささるゝ

朋友有信

信をささるゝとささるゝとささるゝ

大小の分 元禄十丁巳年

大徳をささるゝとささるゝとささるゝ

あまづらむ坊主ふしと昨をたす

舟町海一の画談

弟孝らや只とちうちさる海子
え日を起すやうなりる良き作
そは孝は左の耳よありとく水

店し物よりきす

輝拂や諸人うす極る陰なり
まき若る明る候はるをきり
いさふし年のほふれよふきあり

酒債尋常往処者人生七十古来稀

詩わんとな年を貪る酒債カカチ亦
候はるや子年候はるに年カカチの垢
年中の放下見ふらうと此著
豆とく川高此ら外を笑ひり水

乾元の良か

長き扱れきくく近し得方丸

三律西村煙燭此自画換

今くふ不周十帝や思を外
遠於年此あは世ふつとくくく
年暇や只業年此伊袖ひり

くもぬきぬきそのとくを世に
ゆりゆり伊豆此を人かまひの
なりぬきをひいてその山より
くくくくやせよ

立於子及此小ぬや多れ
何すてしお住居よハハハハ
をうぬきぬき人かまひの
世の中をうけあつて

妖なりぬ 概貧しき 昨をうか
大徳日福のりくわらう年志
信玄園より破戸をうけあつて
誰よとあしお大徳やしき
ゆりゆり戸板めくたし 誰の跡

ゆりゆりぬきぬきむかひと

聖代

主簿おつて日くぬきぬき大徳日

雑之部

十及の圖 画ハ略之

往昔異邦の佛澄輝昨十
半をあしし人向迷悟のつら
志也とてし其書をねんは
ぬきぬき半ハ声音教有く又及
ゆりゆりあつてぬきぬき

爰に十及の家を画續し給て
笑と万世に孫すよの晋其角

尋牛

やこれおのりしう中月おひ

呼牛

よとさるあし道閑てりさるぬふ

隠牛

爰に扱ハ福ぬよ病氣の起り

貧牛

仁兼刺やと終らうしも辛男

廻牛

小使も管ふあやら五月の那

番牛

引しきり曉卒をかひせり

無牛

さうくす枕も床も物履ひ

幸牛

何となくさる夜と朝とをさる

送牛

さゆんよの牛も使はるたわも使はる

老牛

りやもまゝの人のまゝの時分
於冠里公右歌五之梅

三梅

三梅や真の洞へのけらく
花洲のさき平ぬ草や梅のぬ
村ゆれとまじくや芳根の松
几帳丸より官をばく坐の
おとといふわといふまじ

之縁路より海へ口の結れ

一すのめくくの存ありまじ

まじの城のいふまじ

存まじりわりのまじ

城といふ字のまじ

様子わりの一所世話を

子を捨てしむわりの歌の

まじりけりまじ

盆會

ちき規も三日のあつた
十日のあつたあつた

妙法蓮華經

多しりや法の蓮花華經

雪斎亭の花見ふすうく

血をさらぬ深おろく系極

自画談

掉庵やともはなすまは体合

圃より大工石りくむ後の梅

九條殿御下向

傳奏るべきよの六見をわむ此門

海敵場小馬休めりく大根川

法師及冬定之御と大根川

後州久能の別殿さんさめ

かして法師をこゝろけし

ゆーさや法師平男の膝あ

旨延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬音原

續五元集 其角附合 全部三册 出来

江都書肆

日本橋通二丁目

前川六左衛門梓

